

エシカル・トランスフォーメーションと幸福度向上に関する市民意識・行動についての研究



研究員 白鳥 和彦 (研究代表)

令和2年度から4年度の3年間、「SDGs意識・行動変容調査—学習効果によるコンピテンシーの変化—」と題し、都内私立大学大学生を対象に、SDGs意識・行動変容に関する調査を実施した（しあわせ研究所紀要第4号～第6号）。ミレニアル世代・Z世代の学生においては、SDGsの重要性は認識されているが、その行動は、コロナ禍の影響で行動が制約されたことも否めないが、学生特有の経済的および生活上の制約から、直接エシカルな行動に移せる範囲が狭いことが判明するとともに、SDGsやエシカルに対する個人の意識・行動変容を促していくことの重要性があらためて確認できた。

いっぽう、一般市民については、エシカルな行動の志向要因や制約などの評価はまだ十分に研究されていない。また、エシカルな行動に変容することは、自らのしあわせなどを感じられるものでなければ定着しないはずである。そこで令和5年度のしあわせ研究では、実際に社会活動を担い、

地域コミュニティ活動を推進する一般市民（30歳代から70歳代の11名）に対して、持続可能な社会づくりとともに、SDGsが人びとのしあわせにどのように寄与するのかといった点に着目し、社会におけるSDGsを重要とする認識が実際のエシカルアクションに結びつき、幸福度との相関が得られるのか、社会生産活動に帰属してからの関心・行動の変容や幸福度に関して何がトリガーとなるのか、また、それは自らの幸福につながるのか等、SDGs意識やエシカルに関わる意識・行動と幸福度の関係性について調査を行った。

調査方法としては、定量調査（SDGsサーベイ、well-beingサークル）、個別インタビューを通じた定性調査を実施した。

結果としては、SDGsの課題認識や幸福の価値については個別最適の回答となったが、共通して、良好な人間関係構築の影響がトリガーとなっていることが確認された。エシカルアクションに向けた学習段階においても、経済的制約領域に狭められないプロジェクト推進の可能性、エシカルの重要性を日常生活で自分ごととするため人間関係構築に向けたプロジェクトラーニングの可能性など、今後のSDGs意識・行動変容にむけた課題についても得ることができた。